



# やさしさのテスト

ノエル・ランバート・バラス  
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話は台湾での出来事です。

メリニーはできるだけ急いで校庭を横切って走りました。三人のクラスメートがメリニーのほんの数歩先にいました。友人たちは「安全区域」の印を付けたラインに近づいていました。

メリニーは腕を伸ばし、自分の足を強く押しました。ついにそのうちの二人にタッチしました。

「つかまえた！」メリニーは言いました。友人たちは地面にたおれこみながら笑いました。

「速いわね」、ジアが息を切らして言いました。

メリニーはジョニーにもタッチできそうでした。でも、ダメでした。

ジョニーは彼女を指さして笑いました。「遅すぎたね！」それからメリニーの名前を呼びました。

メリニーは顔をしかめました。ジョニーはとっても意地悪でした。メリニーはそれがイヤでした。

放課後、メリニーはキッチンのテーブルにすわり、お姉さんと一緒に宿題に取り組みました。でも、ついジョニーの言ったことを考えてしまうのです。

「リブ、誰かが意地悪なことしたらどうする？」メリニーはたずねました。

リブはメリニーを見ました。「だれかが意地悪なことをしたの？」



メリニーはうなずきました。「学校の男の子なの。いつも意地悪してくるの！」

リブは鉛筆を置きました。「それはつらいわね。かわいそうに。」リブは身をかがめて、うでを組みました。「その子に何かよいことができるかもしれないわ。」

メリニーは鼻にしわをよせていました。「何かよいこと？」それはあまり楽しそうには思えませんでした。

「そうよ！」リブはうなずきました。「あなたが親切にするなら、その子も親切にしてくれるかもしれないわ。やってみたことある？」

メリニーは首を横にふりました。この考えに疑問をいただいていました。なぜメリニーは意地悪な人に親切にするのでしょうか。

その夜、メリニーはいのりしました。「天のお父様、ジョニーがわたしにもっと親切にしてくれるよう祝福してください。」少し間をおきました。リブが言ったことをもう一度考えました。「そして、わたしもジョニーに親切にできる方法を見つけれられるよう助けてくだ



さい。イエス・キリストの御名により、アーメン。」

でも、どんなよいことができるでしょうか。

数日後、メリニーのクラスはみんなでハイキングに行きました。道には大きな緑の木や冷たい小川がたくさんありました。

昼食の時間になると、メリニーは友達と食事をしました。それから、ジョニーが木の下にすわっているのに気づきました。ジョニーはひとりでした。おやつを分けてあげられるかもしれないと思いました。

メリニーはジョニーのところに歩いて行き、すわりました。「こんにちは、ジョニー！」ジョニーは彼女を見上げました。「やあ。」

「クッキー、食べる？」と、聞きました。

メリニーはクッキーを一つ、ジョニーに手渡しました。ジョニーはクッキーを受け取り、にっこりしました。「ありがとう。」

「ハイキング、楽しかった？」とメリニーはたずねました。

「うん。みんなでわたった橋はすごかったね。」ジョニーはクッキーをかじりました。「うーん、本当においしいよ。」

「ありがとう！お母さんやお姉ちゃんと一緒に作ったの。」

メリニーとジョニーは一緒に昼食を終えました。二人とも好きなカードゲームについて話しました。ジョニーは本当にとっても面白かったのです。二人はたくさん笑いました。メリニーは、ジョニーがからかったときよりもこのほうがずっと好きでした。

「ゲームをしない？」ジョニーはみんなのあとについてハイキングコースを下りながら、たずねました。

メリニーはうなずいてほほえみしました。「もちろんよ！」

その後のハイキングの間、二人は交代で岩の間をどきはねました。メリニーは、とても楽しい時間をすごしました。ハイキングが終わって家に帰る時間になると、メリニーは別れるのがさびしくなりました。

「来週、あのカードゲームをしようよ」と、ジョニーは言いました。

メリニーはうなずきました。「いいわよ！じゃあね、ジョニー！」

メリニーは手をふり、にっこりしました。ジョニーはもうメリニーをわかっていていた男の子ではありませんでした。ジョニーは今メリニーの友達になったのです。●

イラスト/スキャリー・ドレイク

